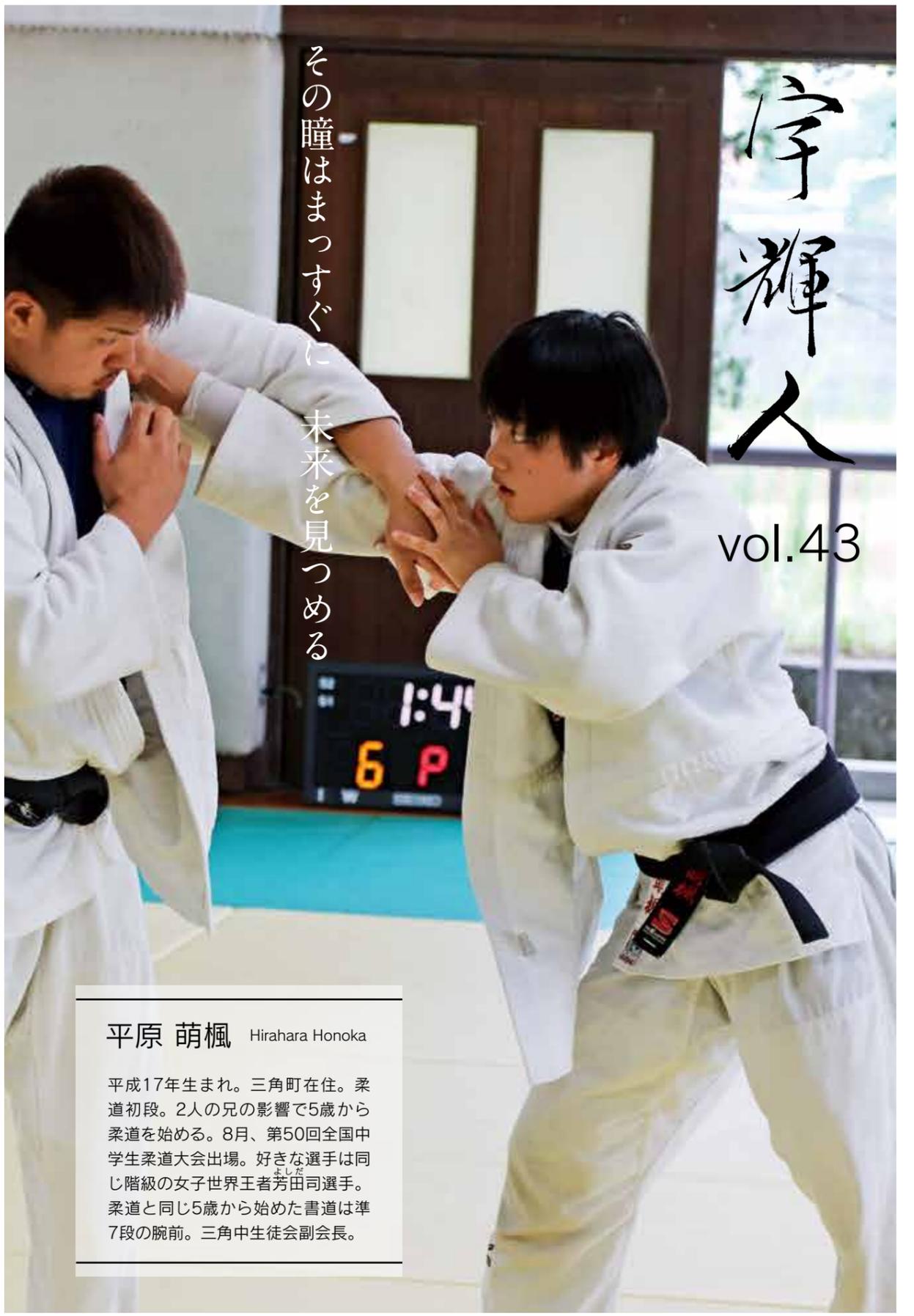


宇輝人

vol.43

その瞳はまっすぐに未来を見つめる



平原 萌楓 Hirahara Honoka

平成17年生まれ。三角町在住。柔道初段。2人の兄の影響で5歳から柔道を始める。8月、第50回全国中学生柔道大会出場。好きな選手は同じ階級の女子世界王者芳田司選手。柔道と同じ5歳から始めた書道は準7段の腕前。三角中生徒会副会長。

いよいよ全国大会へ

8月19日、初めての全国大会。舞台は兵庫県姫路市、全国中学生柔道大会。会場では母と、航海中に寄港先の和歌山から駆けつけた父、三角中の校長先生が見守る。一段高くなっている試合会場の畳に上がると、会場全体がきらきらと輝いて見えた。「楽しい！」

初戦、鳥取県代表を相手に得意の大外刈りが一閃。わずか16秒の早業だった。続く2回戦の相手は福島県代表。開始15秒。「一本！」内股が決まり、主審の手が高く上がった。ベスト8を懸けた3回戦の相手はシードの愛知県代表。相

手にとって不足はない——自分の道をまっすぐに

5歳のとき、兄2人の影響で柔道を始めた。女の子だから、と両親は心配したが自分の意思でやると決めた。当時から平原萌楓さんを指導する秀光塾(三角町)の柳光さんは「真面目な選手。けがをしても見学にきて練習を休みません。それに負けず嫌いで、試合で攻撃の手を休めないところにも性格が出ています」と評する。

人として成長するために

平原さんは「柔道の好きなどころは人として成長できるところで

す。試合や合同練習で出会った強い選手たちは、人格も素晴らしい。試合になれば絶対に勝つという気迫が出ているけれど、相手を見下したりしない。私もそうなりたいと思っています」と話す。

学校でも進んで役割を果たす。2・3年生と続けて生徒会役員を務め、意見発表会などで学校の代表になることも多い。

「いろんなチャンスを逃したくないんです。特別な体験にはチャレンジしたいという気持ちがいっつもあります。それはこれまで、家族がそういう経験を私にさせてくれていたから」

逆風のときも前を向く

決して順風満帆ではなかった。中学では、けがも続いた。県大会ではライバルが壁になり続けた。

——全国大会での3回戦、相手の投げをこらえてついた右肘が脱臼し、ドクターストップ。悔いは残ったが新たな目標もできた。

「三角中だけでなく、松橋中の山本登志雄先生や柔道部のみんなにも一緒に練習してもらい、全国大会に出ることができました。けがを治したらみんなと一緒に練習して、あの全国大会のきらきらした感じをまた味わいたいです」

道はまだ、続いている。



1. 県体代表の成年男子選手とも合同練習を行う 2. 小学5年。九州大会で敢闘賞 3. 全国大会出場を祝う横断幕の横で 4. 生徒会役員として宇城市子ども議会で一般質問 5. 9月 宇城市で開かれた県体柔道競技にも計時係として参加 6. 5歳から教わる書道の平木由美子先生と

